

三寡婦の  
言

日露戦役  
と國旗の  
掲揚

天皇陛下を仰ぐの情は、實に言ふべからざるもの有りて、彼等は公々然として明言すらく、若し日露戦争微りせば、新疆は既に清國の有には非ざりしならん。万里の異郷に在りて是等の情況を見聞す。豈痛快禁ずる能はざる無きを得んや。

一日、予一纏頭郷約の招に應じて之に赴く。座に在る者數人、談偶々日露の戦争に及ぶ。一人曰く、露領某村に、我が知れる三人の姉妹寡婦あり。其の夫皆徴せられて同役に戦死す。然るに彼の寡婦三名は、異口同音他に語るらく、夫の死や眞に悲むべし。然れども日本の戦勝は、實に賀すべし。抑々夫をして死に至らしめ、妾をして斯く悲しむに至らしめしは、抑も誰の罪ぞと。未だ曾て毫も貴國を恨むの色なし。況んや戦争當時に於ける當地の狀況に就きて思へば、噴飯に堪へざる一事あるをや。果して之を何とか爲すと。彼れ嬉々語を次いで、初め九連城の戦報あり、其の勝敗未だ知るべからざるに、露領事は、洽く居留地内に嚴達して、露國既に勝利を博す。宜しく國旗を軒頭に掲げて祝すべしと。居留民之を信じ、一齊に國旗を掲ぐ、未だ幾許ならず、北京より詳報至り、露國の大敗、貴國の大勝を傳ふ。掲げし旗は一つ滅し、二つ滅し、次第々に相滅じて、遂に全く撤去せらる。以來遼陽の